

第1弾 「なぜ、養成講座を開催するのか」

不登校の子どもと家族を、誰が支えるのか

全国の小・中学校における不登校児童生徒は、令和6年度には約35万4千人となり、過去最多を更新しました。

さらに、そのうち約13万6千人は、学校内外の機関等で専門的な相談や指導等を受けていないことが文部科学省の調査で明らかになっています。

「約35万人」という数字は大きな社会的課題を示しています。

しかし、私たちがもう一つ注目したいのは、その中に「相談したくても、どこに相談したらよいのかわからない」「相談しても、必要な支援につながらない」という子どもや家族が少なくないという現実です。

不登校への支援は、決して「学校に行けるようにすること」だけではありません。

子どもが安心して生活できること、家庭の中に安心できる関係があること、そして、必要なときに適切な支援につながることを。

その一つひとつが、子どもの回復や成長を支える大切な土台になります。

学校には、すでにさまざまな支援があります

現在、学校では不登校の児童生徒に対して、さまざまな支援が行われています。

例えば、

- ・ 校内別室や校内フリースペースなど、学習や休息ができる場を用意する
- ・ 少人数・個別指導や、柔軟な時間割、段階的な登校を調整する
- ・ ICTを活用したオンライン授業や家庭学習など、多様な学びの機会をつくる
- ・ 学級担任だけに任せるのではなく、生徒指導主事、養護教諭、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなどがチームで支援するなど、子どもの状況に合わせたさまざまな取り組みが進められています。

文部科学省も、不登校支援において、学校だけで抱え込むのではなく、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、関係機関等との連携によって、多様な支援を行うことの重要性を示しています。

では、これだけ支援の選択肢があるにもかかわらず、なぜ必要な支援につながらない家庭があるのでしょうか。

「学校だけでは支えきれない」家庭があります

不登校の背景は、一人ひとり異なります。

学校での人間関係や学習のつまずきなど、学校生活の中に大きな要因がある場合には、学校が中心となって環境を調整し、支援を行うことができます。

一方で、

- 家庭内の不和
- 経済的な困難
- 保護者自身が抱える悩み
- 子どもへの関わり方に関する困難
- 家族の介護負担
- 家庭全体の生活リズムの乱れ

など、家庭側の要因が大きく関係している場合には、学校だけでは対応が難しいケースもあります。

学校には学校の専門性があります。

しかし、家庭の中に入り、家族関係や生活そのものを継続的に支援することは、学校の本来の役割だけでは十分に対応できない場合があります。

その結果、

「学校にも相談した。でも、どうしたらいいのかわからない」という状態のまま、支援が途切れてしまう家庭があります。

また、保護者自身が疲れ切ってしまい、

「もう誰かに相談することさえ難しい」という状態になっている家庭もあります。

文部科学省も、保護者への情報提供や相談支援、学校・福祉・関係機関等との連携の重要性を示しています。

しかし、制度や支援機関が存在することと、実際に家庭がそこにつながることは同じではありません。

ここに、私たちは大きな支援の課題があると考えています。

なぜ「訪問看護師」なのか

私たちは、この支援の切れ目に対して、訪問看護師による「訪問型伴走支援」という新しいアプローチが必要なのではないかと考えました。

そこで令和 7 年度の WAM 助成事業において、不登校家庭を対象に、精神科訪問看護ステーション等と連携した訪問支援に取り組みました。

訪問看護師の大きな特徴は、家庭という「生活の場」に入って支援できることです。

病院や学校などの「支援の場」に来てもらうのではなく、支援を必要としている家庭へこちらから出向いていく。

そこには、大きな意味があります。

実際の生活を見る。

子どもの様子を見る。

保護者の思いを聴く。

親子の関係を見る。

そして、その家庭が今、何に困っているのかを一緒に考える。

訪問看護師だからこそ見えてくるものがあります。

特に精神科訪問看護の経験を持つ看護師には、こころの状態を捉えながら、生活そのものを支援する専門性があります。

「登校」だけをゴールにしない

不登校支援で大切なのは、すぐに「学校へ戻す」ことだけではありません。

まずは、

安心できること。

生活が少しずつ安定すること。

親子の関係が少しずつ変わっていくこと。

子どもが「自分のことをわかってくれる人がいる」と感じられること。

そこから、次の一歩が始まります。

訪問看護師が家庭に入り、子どもと関係をつくりながら、

「今、どうしたいと思っているの？」

「何だったらできそう？」

「何が一番しんどい？」

といった、子どもの思いを丁寧に聴いていく。

同時に、保護者にも寄り添いながら、

「どう声をかけたらいいのか」

「どこまで見守ればいいのか」

「今の子どもに何が必要なのか」

を一緒に考えていく。

親子それぞれに関わることで、家庭の中に少しずつ変化が生まれることがあります。

そして、その変化が、子どもが次の一歩を踏み出すための土台になるのです。

「訪問看護だからこそできる不登校支援」

不登校になった子どもの家庭では、保護者もまた、大きな不安を抱えています。

「このままで大丈夫なのだろうか」

「学校に行かせなければいけないのではないか」

「自分の育て方が悪かったのではないか」

そんな不安や焦りを抱えながら、毎日子どもと向き合っています。

だからこそ、家族だけで問題を解決しようとしても、これまでの親子関係の中では、なかなか新しい関係をつくるのが難しい場合があります。

そこに、第三者である専門職が家庭に入り、親子それぞれに寄り添うことには大きな意味があります。

子どもには安心できる関係をつくる。

保護者には、責めるのではなく、一緒に考える。

そして、子どもが本当はどうしたいのか、その思いを丁寧に聴いていく。

子どもの気持ちが少しずつ見えてくると、保護者も「どう接したらよいのか」を考えられるようになります。

その積み重ねが、親子関係を少しずつ変えていく可能性があります。

私たちは、令和 7 年度の WAM 助成事業を通じて、このような訪問支援の実践に取り組み、訪問看護師が持つ専門性やスキルが、不登校家庭への支援に活かせる可能性を実感しました。

だからこそ私たちは、この取り組みを一部の経験豊富な訪問看護師だけのものにせず、地域の訪問看護師が学び、実践できる支援へと広げていきたいと考えています。

そこで、今回の養成講座を開催します

一方で、WAM 助成事業を通して見えてきた新たな課題もありました。

それは、訪問看護師による不登校支援が、現状では一人ひとりの看護師の経験や技量に大きく支えられているということです。

不登校支援に必要な知識や技術を、体系的に学ぶ機会はまだ十分とはいえません。

そこで今回、

「訪問看護師のための不登校支援スキルアップ養成講座」

を開催することになりました。

講師を務めていただくのは、宮崎県立看護大学教授で精神看護学を専門とされ、これまでの WAM 助成事業でも事業評価や事例検討にご協力いただいた川村道子教授です。

この養成講座では、

- ・ 「不登校現象」を理解する
- ・ 不登校児への支援に必要な基礎知識を学ぶ
- ・ 家族支援の意味と具体的な支援方法を学ぶ
- ・ 不登校児への早期支援の必要性を理解する
- ・ 多機関連携と社会資源の活用方法を学ぶ
- ・ 訪問看護による支援を振り返り、実践につなげる

など、不登校支援を訪問看護の現場で実践するために必要な知識と技術を、全 6 回を通して体系的に学んでいきます。

単に「不登校について知る」だけではありません。

実際の家庭にどう関わるのか。

子どもとどのように関係をつくるのか。

保護者にどう寄り添うのか。

学校や関係機関とどうつながるのか。

こうした、現場で実際に必要となる視点を身につけることを目指します。

そして、現在の経験やスキルをさらに一步引き上げ、訪問看護師一人ひとりが不登校家庭に適切に関われる力を身につけることを目指します。

私たちが目指していること

私たちが目指しているのは、単に「不登校支援ができる訪問看護師を増やす」ことだけではありません。

「訪問看護だからこそできる不登校支援」という新しい専門性を地域につくることです。

学校には学校の専門性があります。

医療には医療の専門性があります。

福祉には福祉の専門性があります。

そして、訪問看護には、家庭という生活の場に入り、子どもと家族の双方に寄り添いながら、生活とところを支える専門性があります。

それぞれの専門性がつながることで、これまで支援につながるできなかった家庭にも、新しい支援の道をつくることのできるのではないのでしょうか。今回の養成講座は、そのための第一歩です。

次回からは、この講座で私たちが大切にしているテーマを、一つずつご紹介していきます。

1. 不登校の背景には、家庭のさまざまな課題が関係しています



2. 訪問看護師が家庭に入り、寄り添いながら支援します

